

第 101 回ベルギー研究会発表要旨

マルク・カグブール、『フランス語によるベルギー文学史のための標識』翻訳について」

馬場 智也（京都大学）、山内 瑛生（武蔵野大学）

ベルギーのフランス語文学が示す全体像を、日本語で理解することのできる本が作れないだろうか。こうした着想のもと、私たちは共同で、マルク・カグブール氏の著作の翻訳に取り組んでいる。これまで日本でも当該分野の専門書が出版されてきたものの、その内容は 19 世紀文学や象徴主義文学を扱うものが多かった。本発表ではこうした研究状況を振り返りつつ、20 世紀後半までを射程とする本書と、その翻訳が持つ意義について述べていく。また発表の後半では本書の持つ特徴について、その冒頭部分と目次を示しながら具体的に見ていく。最後に当プロジェクトの今後の展望について述べるとともに、教科書的かつ読み物的なエッセーでもある本書の出版に向けた働きかけや、翻訳を行う上での実際的な問題（作家の名前の表記など）について、異分野の参加者からも広くご意見をいただけると幸いである。

幕末明治期の開港場横浜における外国人社会とベルギー人 (3) 領事裁判権・領事の立ち位置・言葉の壁

後藤 加奈子（リエージュ大学）

日本との条約締結（1866 年）以来、ベルギーは横浜をはじめとする開港場においてその存在感を示し始める。1880 年から 84 年まで在横浜ベルギー領事を務めたギュスターブ・スクリーブは、本国に向けた報告において、日本という新市場にひしめく欧州各国の商業事情の分析や、日本におけるベルギー商品の占める位置についての見解を述べている。本発表では、現在ではその名が殆ど知られていないスクリーブの領事としての横浜での活動について紹介するとともに、開港場において外国人居留民と現地の人間を繋ぐ緩衝材のような存在であるべき「領事」という役職に関し、その権限の行使の実態と濫用の可能性や危険性についても併せて考えたい。

放送オーケストラにみる 20 世紀前半のベルギーにおける音楽文化振興

井内 千紗（拓殖大学）

本発表は、ベルギーの国営放送が運営した放送オーケストラ、特にベルギー放送交響楽団（現ブリュッセル・フィルハーモニック）に焦点を当て、放送を通じた音楽文化振興の歴史的意義を考察することを目的とする。放送の黎明期において、ベルギーでは国家レベルでの文化政策や公的支援の体制が未整備であるなか、放送オーケストラは国家組織として全面的な支援を受け、音楽文化振興の重要な担い手となった。特に 1935 年に設立されたベルギー放送交響楽団は、フラーンデレン語局の音楽監督パウル・コラルルの主導により現代音楽の推進に力を入れ、国際的な評価を得た。本発表では国営放送設立の背景、放送オーケスト

ラの組織変遷、そしてコラルの方針の実践に至る過程を概観しながら、1920年代から1950年代にかけて、ベルギーにおける音楽の公的支援と現代音楽振興の基盤が形成された経緯を明らかにする。

ベルギー連立交渉の光と影ーコミュン選挙からアリゾナ政権樹立までー

武居 一正（福岡大学）

皆さんも御存知のように、昨年6月9日の下院選挙以来236日を経て1月31日に政府合意が成立しました。フランデレンのナショナリスト政党 N-VA のバルト・ドゥ・ヴェーバーが首相になりました。どのような議論を経て成立したのかを概観したいと思います。途中で何度か交渉が止まってしまう事件が起きました。Vooruit フランデレンの社会党党首のコナー・ルソーと MR ワロニーの自由党党首のジョルジュ・ルイ・ブッシュェの間の左右対立がそれらの原因です。その経緯をたどります。それから、成立した連立合意の内容を見たいと思います。各党が何を得たのかを見ます。そして、最後に妥協したブッシュェの心の内を探ります。時間があれば、今後の国家改革の可能性に触れたいと思います。政治に関する新聞記事やテレビ・ニュースはあまり御覧になったことがないでしょうから、なるべく関係画像を御覧に入れたいと思っています。

カロリーヌ・ラマルシュの作品に見る従順な女性たちの反抗的な眼差し

岡本 夢子（滋賀県立大学）

キャロリーヌ・ラマルシュは1955年リエージュ生まれの、現在も活動を続ける多産な作家である。前回の発表では2023年にTextylesの特集号が組まれていることからラマルシュの作品は文学研究の対象となりうることを確認した。彼女の創作活動は詩から児童文学まで多岐にわたるが、中でも本研究は主従関係に基づく性愛をテーマとした作品に注目し、最終的には同テーマの系譜の作品群の中で位置付けることを目標としている。

前回の発表ではLa Nuit l'après-midi (1998) に描かれた主人公の服従に対する態度に疑問を投げかけた。本発表ではCarnets d'une soumise de province (2004)の主人公Renardeを扱い、官能小説として異端視されがちな両作品の中の女性の眼差しを扱う。

ベルギーと主要なヨーロッパの観光都市の事例から日本の観光にかかわる課題と対策を探る

澁谷 恵美（追手門学院大学）

本発表では、日本とベルギー、その他ヨーロッパの主要な都市における「オーバーツーリズム」をテーマにとりあげる。観光庁、観光局、観光協会、観光案内所および各機関（Belgium.be, n.d.; DMO KYOTO, n.d.; European Commission, n.d.; JNTO, n.d.; 京都観光Navi, n.d.; 京都市情報館, n.d.; MLIT, n.d.; UN Tourism, n.d.; Visit Bruges, n.d.）などを中心に、役割やイニシアチブ、観光にかかわる地域の課題、その解決のための対策例をコロナ

禍の前後にも焦点をあて、文献やデータなどから議論をする。

「訪れる場所」、「居住の場所」または「働く場所」などのような異なる捉え方や、かかわる人々や分野の多さからも観光における課題の内容は多岐にわたるといえる。一方、現場での様々な取り組みへの評価や、昨今の観光をとりまく地域での経済活動、文化交流、教育面でのポジティブな側面も明らかとなり、今後は観光ガイドの役割から、観光における課題への対応や取り組みを検討する。